

第44号 華山会報

令和2年6月1日

公益財団法人華山会

渡辺華山に憧れた鈴木鷺湖

尚美学園大学大学院芸術情報研究科教授 伊藤紫織



鈴木鷺湖（一八一六～七〇）は渡辺華山の夭折した末弟如山と同一年の職業画人である。谷文晁の門人に師事し、人名録等に載り、当時はそれなりに有名だった。今その名が残るのは孫の石井柏亭、鶴三の名声によるところが大きい。石版画で注目される石井鼎湖の父でもあるが、本人の知名度は低い。現在の千葉県船橋市の出身であることから、前職場千葉県美術館で郷土ゆかりの画家として作品収集の対象にしていたため、筆者はその画業に触れる機会を得た。鷺湖と華山とは、菊池教中『澹如詩稿』に両人の画が載ってはいるし、晩年の文晁周辺で接点を持った可能性はあるものの、直接の交流は伝わらない。しかし残された作品から見ると鷺湖は華山に思い入れがあったようだ。

華山が蚕社の獄で蟄居中に描いた「于公高門図」（重要文化財、福田美術館）の図様は周辺の画人によく伝えられ、一部の図柄を変えた華山の弟子井上竹逸、永村茜山の作例（共に田原市博物館）があり、後には奥原晴湖も手がけている。鷺湖にも慶応二年（一八六六）の「于公高門図」（千葉市美術館）があり、華山の作品よりも横幅を広く取り、細部のちりちりとした描線や陰影を強調した描写に特徴を示すが、自身で全翁（華山）に倣うと画中に記している。元治元年（一八六四）の「両国橋納涼図」（田原市博物館）も、画中に華山先生の作を模写したと記すように、同じ図様の華山「両国橋納涼図」（田原市博物館）がある。華山「一掃百態図」（田原市博物館）的な画風をも鷺湖は取り入れている。

文久二年（一八六二）の鷺湖「黄梁一炊図」は華山が蟄居中に描いた同題の作品に図様を倣いつつ、関連する別の故事を描いている。華山が版本『唐土名勝図会』巻六「盧生」の図を用いて描いたのは、戦国時代の趙の都邯鄲で青年盧生が道士呂翁から枕を借りて眠る間に、立身出世の五十年余りの夢を見て、目覚めてみると炊きかけの黄梁もまだ炊きあがっていないわずかな時間であったという唐代沈既済の伝記小説『枕中記』の故事であった。この呂翁はすなわち仙人の呂洞賓である。鷺湖が描くのは盧生ではなく呂翁その人で、人生の虚しさを知ったことが鍾離権に弟子入りするきっかけとなる。室内の軸を書から「雪中騎驢」とわかる絵に替えたり、水を飲む犬を黒から白黒のぶち模様替えたりしている。華山の息子小華（一八三二～八七）が少なくとも二点華山画を写した図を残すことから、この「黄梁一炊図」の図様は華山作品として重視されたと考えられる。小華と鷺湖の足跡は松浦武四郎周辺で交錯する。

鷺湖は松浦武四郎『石狩日誌』の跋文で自分自身を「無官無文、画を以って業となすが南北の山水を多く知る」と述べる。そんな鷺湖にとって、高位の武士で、学問がある華山は憧れの文人であったのだろうか。

『全樂堂記伝』(三)

— 華山伝記の根底テキスト —
 研究会員 別所興一

華山・渡辺登が海外事情に関心をもち、蘭学を学ぶようになった動機について、『全樂堂記伝』は次のように記している。

「抑伯登海防ノカ、リヲ心得タリケレバ、彼ノ西洋ノ事情ヲ知ラズバアルベカラズトテ、友人ノ中ニ和蘭ノ学アルモノニ其詳ナルコトヲキ、又世界地理ノ事ハ少年ノ時ヨリ志シケルガ、猶考察シテ精ヲ尽セリ」

第一に、華山は天保三年（一八三二）四十歳で江戸詰めの家老職（年寄役末席）に就任し、藩の海防掛を兼任したこと、外敵である西洋諸国の事情を学ばなければならぬ、という役目柄の必要である。

第二に、年若い頃から西洋の絵画や世界地理に興味を持っていたことから、西洋の学問や社会を精細に考察したい気持ちを持つようになった

ことである。

華山は役目柄から、幕府が全国諸藩に出した「藩領の海辺の防衛に備えるべし」という通達に因應するために、差し当り近海を通行する外国船の国名を知る必要があると考えた。

それで、自ら外国の軍艦・商船の船型と帆船の図を描き、オランダ・イギリス・ロシアなどの国名を弁別して、外敵侵入の緊急時に対応できるようにした。田原藩の独自事業として、その絵図を海辺の村々の役人に渡し、それぞれの海辺の役所に張らせ置くよう手配したのである。

また、領民に海防の心得を喚起するため、幕府の許可を得た上で、毎年春秋二回、海防の操練を実施するとともに、軍備を整えた藩ぐるみの狩猟行事（猪狩り）も開催して、武備にゆるみのないよう策を講じた。

これらの先進的な海防策は、小藩ながら全国諸藩から注目され、田原藩に視察や問い合わせが相次いだのは、家老の華山の先見性によると言えよう。

天保六年（一八三五）に華山は、予想される飢饉に備えるために、義倉「報民倉」の建設を藩主三宅康直に要請し、その年十一月に竣工にこぎつけた。その経過は、本書に次のように記されている。

「天保六乙未、公（藩主）に白シテ濟厥（救荒施設）ヲ起ス。公ノ民ヲ愛セラル、意ニ感ジテ、一藩ノ士人ハイフニ及バス、百姓共ヨリ封内ノ社人山伏出家マデモ、ヲヒヲヒニ出テ石土ヲ運び、材木ヲ献ジ、鋤鋤ヲ執リテ建築ヲナシ、手伝ヲナシケレバ、日ナラズシテ落成セリ。公、親墨ニテ報民倉ノ三字ヲ書シヒテ扁セラル。此時伯登、潤筆ノ得シ所モテ、粟若干苞ヲ奉リ、儲ノ助トナセリ」

華山が藩主に頼まれ、この義倉の建設の趣意書を書いて公布した結果、藩主の愛民の呼びかけに応じて、藩内の武士はもちろん、百姓・神官・僧侶までも、資材の寄付や労働奉仕に惜しみなく協力したことを物語っている。また、華山は画作で得た収入で自ら粟を購入し、貯穀米の一助

目次

題字「華山会報」元華山会理事
 故小澤耕一氏

P ① 渡辺華山に憧れた鈴木鷺湖
 伊藤紫織

P ② 全樂堂記伝（三）別所興一

P ⑥ 渡辺華山『毛武遊記』②①

P ⑩ 四州真景の旅⑦

P ⑭ 令和元年度華山・史学研究
 会研修視察
 足利の華山の足跡をたどる

P ⑯ 公益財団法人華山会
 田原市博物館

からご案内





報民倉扁額

にしたことが知られる。

田原藩の義倉の元米は、全国諸藩の義倉のように領民からの貢納は求めず、もっぱら藩主や一般藩士が家計を節約して献納したものであり、元米の放出を受けるのは、飢饉で困窮した百姓に限られていた。田原藩の義倉は、類例のないやり方をしていたことがわかる。

倉の名称を、藩主が上から恵与す

る救民や済民ではなく、報民としたことも、田原藩独自の領民尊重の思想が認められると言えよう。

強いて難を言えば、この救荒施設を最初に提案したのは、華山が田原藩に国産物の栽培・加工の技術者として招いた大蔵永常だったのに、永常関連の事はまったく言及していないことである。

天保七年（一八三六）に田原藩を襲った飢饉については、次のように書いている。

この年は夏に冷気の日が続いたので、米・麦共に不作となり、米価が暴騰した。八月になり烈風大雨がしばしば襲来して家屋が倒壊したり、高潮の襲来で稲が不熟になったりして、翌年春には庶民が飢えに苦しむことになった。これに対する藩首脳部の対応は、次のようであった。

「公（藩主）在国ニテ憂勞シ玉ヒ、荒事ヲ以テ伯登（華山）ヲ召セドモ、伯登冒寒枕ニ伏シ、召ニ応ズルコト能ハズ。用人真木定前ヲシテ代テ往

カシム。扱其病劇シテ殆ド危カリシカドモ、公ニ書ヲ上リ、荒事ノ謀ヲ申サントスレドモ、筆ヲ運ズコト能ハズ。纒ニ三数字ヲ書シテ荒政ノ行届キ庸功ヲバ成シ玉ハラシコトヲ白シ、又去冬ヨリ救荒書ヲ旁々購求シ、病中猶人ヲシテ写サシメ拜シテ、之ヲ送リテ荒政ニ預ル者ノ為ニナセリ」

この時期に田原に滞在した藩主は、救荒の指揮をとらせるため、華山を田原に呼び寄せようとしたが、あいにく華山は、風邪で伏していたため、身代わりとして腹心の部下の真木定前を派遣した。重篤な病状だったけれども、華山は死力を尽くして救荒の心得書を執筆し、国元へ送った。現地の窮状の打開に多少とも役立つことを願ったのである。

また、救荒のために自分が購入した本を、病中も読み、部下に筆写させて送付し、現地の役人の参考にするよう手配した。

藩主・三宅康直は、華山の教示を重く受けとめ、率先垂範してそれぞれに係役人に、巡村して窮民を援助

するよう指示した。また、真木に随行した藩医の鈴木春山らに命じて、村の病人の手当てをさせたり、報民倉の貯蔵米を分配したりした。

その結果、領民たちは藩主に恩義を感じて、「皆上ヲ助ケテ、富メル者ハ勿論、貯アル者ハ或ハ穀、或ハ錢ヲ施シ、或ハ粥ヲ煮テ施行スル者モ此々アリテ、竟ニ餓死ニ及ブ者一人モナカリキ」という次第になり、飢饉の難局を切り抜けたのである。

天保九年（一八三八）八月には、田原藩主は幕府から「窮民救方手当等格別行届候由相聞一段之事ニ候」という理由で褒詞を賜ることができた。

しかし、これには裏話があり、田原藩主の功績が風の便りに幕閣に届いて、表彰されたわけではなかった。飢饉後の藩内の人心のゆるみを防ぎ、復興の気運を強めるために、華山が親交のある幕府の要人に、褒詞内願書を提出した成果とみるのが、真相に近いと言えよう。

『全楽堂記伝』には、この後、華山自身の質素儉約と人情味を示すエ

ピソードを、いくつか記している。その一端を紹介しよう。

「荒歳ニハ自減食シテ、平常三椀ツツ食フモノヲ、二椀ツツ食ヒテ米ヲ羨シ貯ヘ、出入セルモノ、窮者ニ五升ニ升乃至一斗ツツ与ヘキ」

「嘗テ親戚ノ不給ヲ助ケ、朋友ノ患難ヲ恤ミ、人の紛ヲ解シタルコト共ハシバシバナリ。常ニ為人謀而不忠乎トイフコトヲ心得タル人ナリキ」

飢饉の年には、自分が日ごろ食べる量を減らして貯めた米穀を、自宅に出入りする困窮者に恵与した。親戚や友人の資金繰りを援助したり、紛争を解決してやったりすることも、しばしばだった。華山はいつも人のためを思つて行動し、真心を尽くさなかつたことはないかと自省する人だった、というわけである。

こんな話を聞くと、華山は常人の近寄りがたい聖人君子、世俗的な享樂の世界とは無縁な堅物のような印象を受ける。しかし、実際の華山は、江戸家老としてしばしば料亭通いをし、時には芸者遊びをすることもあ

った。生計のためとはいえ、春画を描いて売つたこともあり、卑猥な内容の狂歌をいくつか書き残してもある。華山は極度に禁欲的で猷身的なモラルを持つ半面、原理主義に徹しきれず、情欲に溺れる一面もあつたのである。こうした事実を知つて、華山に幻滅する人もいるであろうが、筆者はむしろ人間的な親近感を覚える。独善的な曲解であろうか。

華山の江戸家老としての任務は、涉外担当として幕府や他藩の情報を収集することだったが、情報交換の場所は主に料亭だった。料亭通いは、役職の上でやむを得なかつた面がある。その費用は、華山の画作が当時好評で、かなりの潤筆料を得ていたから、それで支払つたと思われる。しかし、かねてから華山に反感を持つていた藩内反対派により、華山は国元から送られた公金を流用して料亭通いをした、という悪評を流され、後年の自刃の一因にもなつた。

『全楽堂記伝』には記載されていないが、この時期、華山が家老として尽力したことに、藩校成章館の振興がある。田原藩の将来の発展はひとえに人材の育成に関つていといふ考えから、藩校の沈滞した気風を刷新するために、江戸の名高い儒学者伊藤鳳山をスカウトして講師に招聘した。これに対して、藩財政の窮状にも関わらず外部講師を厚遇して出費を増やしたり、小難しい講義や式典につき合わされたりすること

に、やりきれなさを感じた藩士も少なくなかつた。華山の藩政改革は、藩ぐるみで支持されていたわけではなく、一定数の反対派が存在したことを指摘しておきたい。

天保九年(一八三八)三月に華山は、自分の蔵書五百五十余部、書画蔵幅二十余軸、画冊法書若干帖を、目録を添えて藩主に献上した。書物は藩士の後輩子弟の勉学用として、画幅は藩財政窮乏の際の換金用として寄進したのである。その目録に添えた趣意書には、青少年期の華山一家の苦境が、次のように記されている。

「一、私儀八歳ノ節被召出、日勤御奉公仕候処、亡父大病ニテ二十年余伏枕罷在、昼夜看病ニ隙無之、其上兄弟八人皆幼少ニテ同居仕、困窮飢寒相迫リ候程ノ事故、鷹見弥一右衛門定允ニ被勸絵事稽古仕、内職ヲ以テ急ヲ救如何様ニモ取続、追々兄弟共相片付候処、皆不幸ニテ種々難事出来、或ハ客死致シ或ハ窮死致シ、終ニ五人死去仕、常ニ急迫ニ寸陰無之、其上右兄弟共往来相談千辛万苦、誠ニ筆紙及ビ難キ事共ニ御座候」

八歳の時からお城勤めを始めたものの、大病の亡父の看病で忙殺されていたこと、その上、兄弟八人の困窮した一家は飢えと寒さが切迫していたこと、それで儒学の師匠の鷹見弥一右衛門に勧められて絵を習い、絵の内職によつて一家の困窮を切り抜けてきたこと、兄弟たちを順番に家から出して他家に縁付かせたものの、みんな不幸にもいろいろ難題が起り、五人が死去したこと、いつも生活に追われて、ほとんど余暇がなく、辛く苦しい相談事が持ち込まれ、



進書趣意書

筆紙に尽くしがたいことばかりだった、という次第だったのである。そんな華山が蔵書や画幅を献上した理由を、次のように説明している。「依之、一日モ安堵ノ日無之候間、読書ノ暇、購書ノ力從來無之、唯所好難捨、不計左之通雜本相集候得共、大体反故同様ノ品、汗顔ノ至ニ候。乍去灯火苦困ノ余ニ出、紙々皆私ノ

膏血ニ御座候間、徒ニ蠹腹ニ葬り候モ残念ニ付、何卒私同様貧苦ノ者へ貸読為致、且書画類ハ一二ノ可觀者モ相交候故、去々年大凶ノ如節、品ヲ以テ一粒ニテモ御賑恤ノ御小補ニモ相成候ハバ、本懐ノ至ニ奉存候」青少年期の私は、心の休まる日は一日もなく、読書する時間も本を購入入する経済力もありませんでした。ですから、その後に自ら好んで購入した本は捨てがたいため、左記のような雑本を集めて献上する次第です。これらの本は、反古紙同様の恥ずかしいものですが、生活の苦しい中であぶらが染みついています。ですから紙魚に喰われるまま放置するのは残念至極です。若き日の私と同様の貧苦の者たちに貸本用として読ませるようご手配ください。

一 緒に献上させていただく書画類は、一昨年の大凶荒の際のように、それを売り出して、一粒でも貧困者の救済米の補助としてお役に立ちましたら、本望に存じます、という要旨である。華山はこの趣意書の末尾に、本の献上は今回だけでなく、今後も新規購入の品が出てきたら、追々献上したいと書き添えている。『玉葉堂記伝』はこの後に、華山の人間像を次のように紹介している。ある人が華山に、貴兄が長年心がけて集めた本なら、少しはご子息に残して読ませた方がよいのではないかと、意見したところ、「愚息共読書等ノ志アラバ、皆吾如ク己ガ力ニテ聚ルガヨロシ」と答えた。しかも、子孫に残しても、きちんと保管されずに散乱しがちであるけれど、藩に献上すれば「永世文庫ニ存スル也」と付け加えたという。

こうした華山の性情については、「常ニ寛容温和ナル性ナレドモ、少年ヨリ義ナラヌコトアレバ、上ヨリノコトニテモ下ノコトニテモ、決シテ聴ザリシ」と解説している。さらに華山の人間関係全般についての基本姿勢を、次のように説明している。「君ヲタスケテ善ニ導キ、過アレバ必進謀シ、諫テ聴カザレバ又諷諫モシ、数度ニ及ビ進退ニカケテ忠敬ヲ致シケリ。其同寮（僚）ノ人ニ親和シテ、其善事ヲ助ケテ功ヲ成サシメ、其怠タル所アレバ之ヲ振ハセ、昏ム所アレバ之ヲ明カニセシメ、実ニ意ヲ尽シヌ。人ヲ使フハ材ヲ愛シ、其僻アル者モ害ノ出ザル如ク扱ヒ、夫々才ヲ用ヒテ功ヲナサシムレバ、人々喜ビテ事ニ従ヘリ」主君を補佐して善導する気持ちで、主君がもし過失を犯したら、自分の身を挺して何度も諫めるなどして、真の忠義を尽くしたい。同僚に對しては親和的な姿勢で應對し、怠惰な面があったら奮起させ、道理を説明するなどして誠意を尽くすように努めたい。人を使用する場合は、それぞれの個性を重んじ、偏った性格の者も害悪が生じず、その長所が発揮できるよう配慮したい。そうすれば、人々は喜んで自分の任務に従事する、というわけである。

渡辺華山『毛武遊記』

(21)

研究会員 加藤 克己

天保二年（一八三二）十月二十二日続き

足利学校を訪れた華山たちは、聖廟で孔子像の胎内銘を読み、像の寸法を測るなどした後、文蔵へ入って、書物や掛け軸を見た。

かくするうち茂木氏そぼふるまはんと、人をはしり越す。日暮んとすれば出て、茂木にいたる。たゞ文庫ぞ心のこりて、蕎麦、そらもなかりき。されども懇意にもてなされたれば、さすがに捨がたくて二碗を喰す。近忠、梧庵相伴。

こうしているうちに、茂木氏が蕎麦を御馳走すると言って、使いを走りよこした。日が暮れようとしていたので、出て、茂木氏の家へ着く。ただ文庫が心残りで、蕎麦のことは全く心ない。それでも、懇意にもてなされたのだから、さすがに断りがたくて、二碗を食した。近江屋忠七と梧庵が共に接待を受けた。

- ※ **茂木氏** 茂木郁三郎。足利学校代官茂木善治の子。明治四年（一八七二）没。茂木氏の家は、現在の足利学校事務所のあたりにあった。
- ※ **文庫ぞ心のこりて** 華山は、文庫（文蔵）でもっと時間を費やしたかった。
- ※ **そら**（多く「そらもない」の形で）心の状態。



渡り堂と仁王門

左手前が渡り堂であろう。右奥が仁王門。

- ※ 心持ち。心地。また、心の余裕。
- ※ 近忠 近江屋忠七。前回は「近江屋」とあった。
- ※ 梧庵 高木梧庵（一八〇八―一六二二）。華山といっしょに江戸から来ていた。

三人の行方は

岡田東塙、奥山昌庵、佐羽蘭溪の三人は、いっどこへ行ってしまったのだろうか。聖堂を出る時は華山といっしょだったと思われるが、どこかで三人と別れたようだ。

出て担角清風楼といえるにいざなはる。途に大日如来の堂あり。これななんと霊場にて街の東にあり。喬木森然として奥に大日の伽藍あり。むねハ雲にそびふるばかり高くひろくて、ワたり堂、二王門、三層浮図、経堂、裏門二、誠に莊嚴といふべきなり。

（茂木氏の家を）出て、担角清風楼という料亭に誘われた。行く途中に大日如来の堂がある。これはたいへん神聖な場所であって、街の東にある。高い木が森のように生い茂っていて、その奥に大日如来の建物がある。その屋根は雲に届くかと思うほど高く広くて、渡り堂、仁王門、三層の塔、経堂、それに裏門が二つあり、本当に厳かでありっぱだといふべきである。

- ※ **担角清風楼** 足利の料亭。場所は不詳だが、鏝阿寺から近いと思われる。
- ※ **大日如来の堂** 鏝阿寺大御堂（本堂）。足利義兼が居館の傍らに持仏堂を建てたという。その後、天福二年（一一三四）、義兼の子義氏が大御堂を建てた。それが現在の大御堂だと言われていたが、実際には弘安九年（一一九六）雷火のために炎上し、正応五年（一一九二）から八年をかけて再建され、正安元年（一一二二）

九九)に完成したという(前沢輝政著『新編足利の歴史』)。国宝。

※ **ワたり堂** 堀を渡る、出入り口の反橋(太鼓橋)の上にかかる屋根のことか。反橋を渡るとすぐ仁王門(楼門)がある。

※ **二王門(仁王門)** 鏝阿寺楼門。仁王像を左右に安置した中央の山門。建久七年(一一九六)足利義兼の創建というが、室町時代に兵火にあい、永禄七年(一五六四)再建された。

※ **三層浮図** 浮図(ふと)は、仏陀または仏塔を呼ぶのに用いた言葉。浮屠、仏図とも書く。ここでは塔のこと。仁王門の左手に立つ鏝阿寺多宝塔。足利義兼の創建と伝えられているが、現在の建物は江戸時代に再建されたもの。宝珠に寛永六年(一六二九)銘のものが発見された。

※ **経堂** 鏝阿寺一切経堂。足利義兼が妻の供養のため一切経会を修する道場として創建したといわれるが、現在の建物は応永十四年(一四〇七)に再建されたもの。国指定重要文化財。

※ **裏門二** 鏝阿寺東門と西門。足利義兼の創建といわれるが、現在の建物は永享四年(一四二二)に再建されたもの。

足利氏居館について

足利の中心部は、先に藤原姓足利氏が領有しており、源姓足利氏が鏝阿寺のある場所に進出したのは、義兼の時、藤原姓足利氏が平氏に従って滅亡した後という。しかし、鎌倉時代を通じて足利

氏は鎌倉に居住し、足利には代官を派遣していたというから、どの程度の館を構えていたのだろうか。館の範囲には直営耕作地を含む。

大日堂ハ在リ街ノ東ニ距ル街ニ二百武。廟宇ハ宏麗、楼門ハ華整。左右ノ松杉ノ蔭樾ハ凝翠ニシテ掠ム人ヲ。寺名ハ曰ヒ鏝阿寺ト、足利義兼ノ所レ叻スル。今所レ存堂宇ハ不ニ曾テ經ニ修茸一茸一者ト云フ。南北ノ小門之礎ハ不レ用レ石ヲ、以テ大木ノ板ヲ後板ヲ下四隅ニ入レ石ヲ。

大日堂は街の東にあつて、街から二百武(約三六〇m)隔たっている。社殿は大きく美しく、二階造りの門は美しく整っている。左右にある松杉の茂った木陰は濃い緑色をしており、人がすれすれに通ることができ。寺の名は鏝阿寺といい、足利義兼が創建したものである。今ある社殿は、創建時のままのものという。南北の小門の礎は、石を用いないで、大木の板をもつて造り、後ろ板の下四隅に石を入れてある。

- ※ **武**「歩」のことか。長さの単位で、一步は六尺で、約一・八m。
- ※ **廟宇** 社殿。
- ※ **楼門** 上に楼のある門。二階造りの門。
- ※ **蔭樾** 茂った木陰。
- ※ **凝翠** 濃い緑色。
- ※ **鏝阿寺** 足利義兼が妻の死を悼んで創建した。寺域は足利氏の居館の跡と言われている。
- ※ **足利義兼** 生年不詳―一一九九か。足利義康

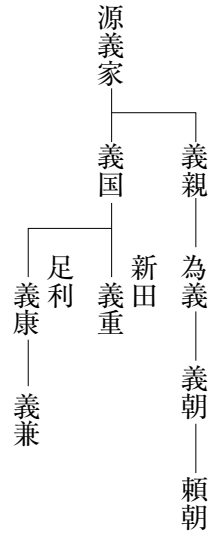
の子。母は熱田大宮司藤原範忠の娘(源頼朝の母の姪)。妻は頼朝の妻北条政子の妹。

※ **修茸** 屋根の茸き替えをする。
 ※ **不ニ曾テ經ニ修茸一茸一** 創建時のままとという意味だが、実際には、火災にあつて再建された。前ページ「大日如来の堂」注。

大日堂(鏝阿寺大御堂、本堂)



源氏略系図



按^{スルニ} 足利上総介義兼（義兼ハ、足利新判官義康）嫡長子、即^チ足利ノ第二祖也。○再^ビ按^{スルニ} 八幡太郎義家、征^{スルニ} 奥州ノ安部^ヲ、後城^ヲ於^テ足利^ニ防禦^ス奥州^ヲ。義家ノ第三子式部大輔義国、居^ス之^ヲ。義国、長子大炊介義重、世^グ之^ヲ。是^レ即^チ新田之祖也。義兼（康）ハ、即^チ義国ノ第二子、足利之祖也）ハ、八條院^ノ時、判^ニ官^ト野総武三州^ニ。鏝阿寺^ハ、蓋^シ為^ニ其ノ夫人^ノ所^ト創^ル云^フ。

思うに、足利上総介義兼（義兼は足利新判官義康の嫡長子である。すなわち、足利氏の第二代の祖である。再び思うに、八幡太郎義家が奥州の安倍氏を制圧した時、足利に後備えの城を築いて、奥州を防禦した。義家の第三子が式部大輔義国で、足利に住んだ。義国の長子が大炊介義重で、家を継いだ。これがすなわち、新田氏の祖である。義康はすなわち、義国の第二子で、足利氏の祖である）は、八條院の時に下野・下総（または上総）・武蔵の三国を領有した。けだし、鏝阿寺は、その夫人のために創建したという。

※ **上総介** 上総国の国司の次官だが、同国は親

- ※ 王が守になるので、介が受領（行政の実質的な長）となる。多くの国の守と同格。
- ※ **判官** 令制四等官制の第三位の官職。特に檢非違使（京中の治安維持にあたる）の場合に、ただ「判官」といった。
- ※ **足利義康** 生年不詳—一一五七。源義国の子。父が下野国（栃木県）足利に籠居した後も京都で活動し、保元元年（一一五六）の保元の乱では後白河天皇方にあつて、平清盛、源義朝に次ぐ軍勢を率いて勲功をあげた。しかし、間もなく死去した。足利荘を相続した。
- ※ **八幡太郎義家** 源義家。一〇三九—一一〇六。源頼義と平直方の娘の子。石清水八幡宮で元服し、八幡太郎と称す。前九年・後三年の合戦に出陣し、東国に源氏の基礎を築いた。延久年間（一〇六九—七三）に下野守となり、その頃足利に「別業」（別宅）の地を設けた。
- ※ **奥州安部** 陸奥国の豪族安倍氏。前九年合戦（一〇五一—六二）で滅ぼされた。
- ※ **後城** ごじょう。ごじろ。ごしろ。後備えのための城。安倍氏討伐にあたって足利に城を築いたというのは疑問。人馬、兵糧を徵発したくらいだろうか。
- ※ **式部大輔** 令制で式部省（文官の人事、大学管理を担当する役所）の第二位の官職。ただし、義国はそれより下位の式部丞だった。
- ※ **義国** 源義国。生年不詳—一一五五。源義家の第三子。久安六年（一一五〇）、勅勘（天皇のとがめ）をこうむり、足利へ下った。その頃、足利を領有していた藤原姓足利氏とは、協力と対立、複雑な関係であったという。その後、上野国（群馬県）新田郡へ進出し、そこで没したという伝承もある。
- ※ **大炊介** 大炊助が正しい。大炊寮（神事、仏会、および宴会などの給米、薪食などを掌る役所）の第二位の官職。
- ※ **義重** 新田義重。一一一四—一二〇二。義国の長男。生年—一三五年説が流布しているが、それでは子や孫との関係で矛盾が多い。一一一四年説が妥当なところ。父義国とともに足利へ下ったと思われる。その後、新田郡へ進出し、開発を進め、新田荘を立荘した。
- ※ **世^レ之^ヲ** 読みは日本図書センター発行『渡辺崋山集』に従った。義重が義国の家督を継いだという意味だろう。しかし、当時は分割相続の時代で、足利荘は弟の義康が継いだ。
- ※ **義兼（康）** ここだけ義兼を義康と訂正すれば、人物の関係は正しくなる。
- ※ **八條院** 鳥羽法皇の第三皇女。一一三七—一二一一。足利荘を含む多くの荘園を相続した。皇后にならずに女院となった初め。後白河法皇の子以仁王を猶子としており、八條院関係者で反平氏の挙兵をした者は多い。
- ※ **判^ニ官^ト野総武三州** 義兼は判官にはならなかった。ここでは「判官」を「領有する」の意味で使っているか。それにしても、三州を領有するほどの力はなかった。藤原姓足利氏の本家が平氏について滅びた後の守護の配置も、下野は小山氏、下総は千葉氏、武蔵は平賀氏だった。義兼は上総介（国司）になった。

三層の塔（多宝塔）



義兼、後、於南都東大寺出家、号義称。正治元己未、歳遷化。
 鏝阿寺、僧院二百戸。
 （上欄外に）義国廟、有寺、西北、不謁。

義兼は、後に奈良の東大寺において出家し、義称と号した。正治元年（一一九九）己未の年に死去した。

鏝阿寺の僧院には二百戸。
 （上欄外）義国を祀るほこらは寺の西北にあるが、参詣しなかった。

※ 出家 義兼は、建久六年（一一九五）、頼朝に従って東大寺供養に参列し、そこで出家したと言われている。その年五月を最後に、政治の舞台に現れない。しかし、跡取りの義氏がまだ七歳なのに家の主が引退するのはおかしいことで、頼朝が多く源氏一門を殺していったので義兼も危険を感じて自ら引退したとも言われている。

※ 義称 義兼の法名。義兼と高野山の鏝阿上人とを混同した説明も見られるが、別人である。

※ 正治元己未歳 一一九九年。

※ 遷化 出家後の義兼については、『吾妻鏡』に記事が一切なく、没年も真相は不明。一般に一一九九年と言われている。一一九九年には、頼朝も没しており、同じ年に亡くなったというのが気にかかる。義兼には謎が多い。

※ 二百戸 封戸（収入源となる家）が二百戸与えられたということであろうか。

華山は、どこで知識を得たか

ここまでの漢文の記述は、足利氏の祖についてずいぶん詳しい。華山は、どこでこの知識を得たのだろうか。「野総武三州」などというオーバールな表現は、お国自慢的に感じられる。鏝阿寺あ

たりに解説書でもあったのだろうか。

途祐廸二逢ふ。ひとしく角清楼にいたる（是即担角清風楼、此号、即岡田氏所名、扁、弘斎之書）。昌庵、岡田氏、蘭溪、未到らず。酒肴を命ぜんとせしに、はや近江や忠七いちちはやく申遣。酒、吸もの、鉢肴、甘もの出る。微薰。昌庵、東塙（岡田氏）、蘭溪来。これ予と行違ひ、酒楼に飲せしよし、皆大醉して到。

途中で祐廸に出会い、いっしょに角清楼に行った（これは即ち担角清風楼で、この号は即ち岡田氏が名付けたもので、扁額は弘斎の書である）。昌庵、岡田氏、蘭溪は、まだ来ていない。酒肴を注文しようとする、すでに近江屋忠七が注文していた。酒、吸い物、鉢に盛った肴、甘いものが出た。少し酒に酔った。昌庵、東塙（岡田氏）、蘭溪が来た。この三人は、私と行き違い、途中の酒屋で飲酒したということで、三人とも大酔いして、やって来た。

※ 祐廸 今尾祐廸。足利の医師。第13回（36号）、15回（38号）参照。

※ 扁 扁額。

※ 弘斎 卷弘斎（菱湖）。一七七七一八四三。越後出身の書家。第13回（36号）参照。

※ 微薰 少し酒に酔うこと。

（続）

『四州真景の旅』⑦
名品「潮来花柳」

研究会員 中神昌秀

一 序

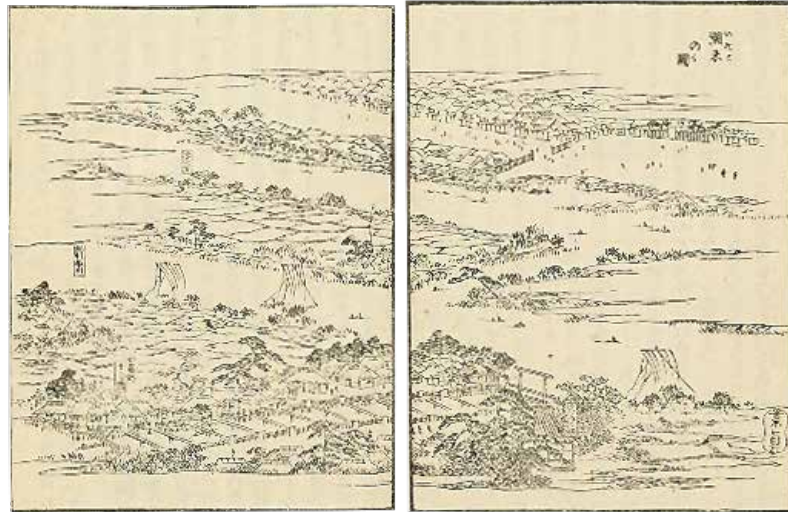
華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』を制作します。旧暦六月二十九日、新暦では八月一三日に江戸を出発し、初日は白井宿（千葉県白井市）に、二日目は津ノ宮（千葉県香取市）に泊まり、三日目に潮来（茨城県潮来市）を訪れます。ここで、水郷潮来の花柳街をモデルに、傑作の一つと言われる「潮来花柳」という真景図を描きます。今回は、この作品を訪ねる旅を試みたいと思います。

二 潮来の繁栄と衰退

潮来は、水戸徳川家の飛地に属し、江戸時代中期まで、東北地方の米や物資の集積地として栄えていました。潮来には慶安二年（一六四九）に仙台藩の蔵屋敷が置かれたのをはじめ、津軽藩、南部藩の蔵屋敷が置かれました。当時の繁栄が偲ばれます。

しかし、利根川東遷が完了した承応年間（一六五二～一六五四）以降東北諸藩の米蔵は潮来から銚子へ移転しました。仙台藩の蔵屋敷も承応年間には、銚子に建てられていました。また船が大型

化し潮来の河岸に出入りすることができなくなった等の理由もあり、一八世紀初頭から銚子は河岸としての機能を果たさなくなり、次第に衰退していきます。



利根川図誌 潮来の図 国立国会図書館デジタルコレクション

三 潮来遊郭の歴史

蔵屋敷が置かれ河岸が繁栄してくると、潮来に限らず船女房と呼ばれる職業が生まれました。これは船中で男性の世話をすると同時に売春を営む女性のことです。やがて船女房は陸に上がり遊び



潮来 復元された大門（大門右の妓楼あやめ楼は2007年火災により焼失、現存しません）

の要素が強くなりました。

潮来遊郭の成立年代について、潮来遊郭の取締の役目にあった関戸家の文書によれば、寛文期（一六六一～一六七二）としています。

その後、水戸藩は天和元年（一六八一）、条件付きで潮来に遊郭を設置することを許可しました。遊郭の場所は新町、のちに浜町と呼ばれる地区です。

遊女人数や客数が明確に把握できる最初の資料は正徳五年（一七一五）に売上高を郡奉行に届けた資料です。それによると遊女屋は九軒、遊女数は八五人で客数は二万四二五〇人であることがわかります。

水戸徳川家は、質素儉約を専らとし、華美・怠惰のいましめを主要な施策として掲げており、遊郭は当然禁止されなければならぬものでした。藩公認の祝町遊郭（鹿島郡磯辺村）には、諸士、領民の登楼禁止令が繰り返し出されています。この禁令は藩公認の潮来遊郭にも適用されました。

四 天保期の潮来遊郭

潮来の遊女屋の数は、江戸時代を通して六軒から一〇軒ほどでしたが、短期間で遊女屋の名前（持主）は交代するが多かったようです。

天保一二年（一八四〇）に南郡奉行所に提出された「遊女奉公人々別書上帳」によれば、遊女屋として河内屋甚左衛門（遊女数二四人）・蓬菜屋清兵衛（一六人）・千歳屋七右衛門（二五人）・松本屋清兵衛（二九人）・双葉屋卯之助（二六人）・松葉屋喜太（二〇人）の六軒が記載されています。遊女奉公にでた年齢は、平均一四・三歳、平均年季期間一〇・四年、平均給金（身代金）は一三両余で、給金の最高額は五〇両でした。

遊女の出身地は、下総が九〇人で全体の六四・三%を占めていました。次が常陸の二八%でしたが、水戸領内の出身者は一人もいません。これは、藩が天和元年に潮来に遊郭を設置することを許可した条件の中に「御領（水戸藩）内の婦女を召し抱えざること」（潮来華街史）という条項があったからです。また銚子市周辺の村の出身者が多く、比較的近隣地域からの奉公人が多いのが特徴と言

えます。

天保一二年（一八四一）に遊女屋と仲茶屋で取り交わされた「遊女仲茶屋連判」という議定書があります。その内容の中に「仲茶屋へ遊女が向くときは昼に限り、暮六ツには遊女屋へ帰すこと。遊女の往来には必ず供をつけ、万一逃亡した場合はずみやかにさがしだすこと。」と書かれています。

五 香取詣、宮本茶村、古鐘に関する釈文

華山は、この旅で銚子まで行っています。四州真景図の中の釈文はなぜか、銚子より手前の潮来で終わっています。しかも、潮来の記述の中には、錯簡があり、分かりづらくなっています。

釈文は、旧暦文政八年七月二日の行程について、まず「香取詣雨風甚」と書かれています。華山一行は、激しい風雨の中を、当時の表参道を歩いて、香取神宮に参拝しました。

次の釈文は「潮来五丁目宮本原右衛門男一 尚一郎號茶村名球字中笏」とあります。香取詣を終えた華山は、津宮河岸に戻り、北利根川の支流にあった潮来へ舟で移動したのでしょう。潮来五丁目では、潮来村年寄役宮本原右衛門の次男である宮本茶村（一七九三〜一八六二）に会います。茶村は久保木清淵（一七六二〜一八二九）とともに延方郷校で教えた水戸藩の儒学者です。なお、東京大学名誉教授の芳賀徹氏の『渡辺華山優しい旅人』では茶村の兄宮本篁村（一七八八〜一八三八）



臨濟宗妙心寺派 海雲山長勝寺

とされていますが、釈文の中笏という字は、茶村が名乗ったものです。華山研究の大家である森銚三氏の四州真景釈文解説は、茶村としています。

次の釈文は「宮本ヲ道として、海雲山へ至、古鐘ヲ見る。本堂に迦葉ノ像あり。もと座像なりしかど、義公御覽して立像になされたるよし。」とあります。宮本茶村の案内で源頼朝（一一四七〜一一九九）創建とされる臨濟宗妙心寺派海雲山長勝寺（茨城県潮来市潮来四二八）を参詣します。本堂は徳川光圀（一六二八〜一七〇一）によって再興されたもので、唐様式で方三間一重、入母屋造茅葺です。そこで、古鐘を見ています。銅鐘は元徳二年（一三三〇）、長勝寺の創建者である源頼朝の菩提のために寄進されたもので、現在重要文化財になっています。

六 潮来の花柳街に関する積文

次の積文は、潮来の花柳街に関する記述で、四州真景図の積文の最後尾になります。まず「いつみや泉助宿」と書かれています。華山一行の潮来での宿泊先の屋号です。

次は「會所」です。會所は一般には寄合（公議）をする場所を指しますが、潮来の浜町での會所は花柳街の上納金を集める自治組織ないしその場所を意味しています。上納金は勿銭（はねせん）と呼ばれ、遊女屋から客一人につき二四文を集めていました。勿銭は會所の予備金として積み立てられ、郡奉行の巡見使の饗応資金となり、また水戸藩にも年間二十両を上納していました（潮来村御用留）。

その次に「女郎屋六軒 松本屋 大和屋 蓬来や 河内屋 庫太や 四目や」と書いてあります。『潮来遊里史と潮来図誌・潮来絶句・潮来節』によれば文政八年（一八二五）の遊女屋数は六軒とありますので、華山の記述と合致します。また、天保十一年に南郡奉行所へ提出された「遊女奉公人々別帳」の中の河内屋、蓬来屋、松本屋は積文の屋号と一致しています。

最後の「なかやど引手茶や」について、「なかやど」と「引手茶屋」は同義です。さらに、仲茶屋も同義です。江戸時代の潮来では、妓楼に直接登楼することはできず、引手茶屋へ遊女が出向っていました。

さて、華山は、旅の一興に茶屋を利用したので

しょうか。旧暦文政八年七月二日の行程は、津ノ宮を出て雨の中を香取神宮に参拝し、次に宮本茶村の案内で海雲山長勝禪寺の古鐘を見ています。この日の日程はどのくらい時間がかかったのでしょうか。ひよつとすると、予定を早めに切り上げて茶屋へ行ったのかもしれない。「遊女仲茶屋連判」という議定書により午後六時で遊女は仲茶屋から帰ってしまうので、急がないと間に合わなかったでしょう。

潮来花柳という風流な名を付けた真景図ですが、どうもそんなに風流にはいかなかったのではないかと、というのが私の見解です。

ところで、華山は遊女屋の屋号を一つ一つ正確に記録していたり、「會所」という言葉を書き留めていたりするところなど、潮来遊郭の調査を行ったようにも見えます。なぜこのような記述を残したのかは謎です。

七 真景図「潮来花柳」

真景図「潮来花柳」について、芳賀徹氏は、「私は先に釜原の牧野の風景が四州真景図巻中一番の作であるかのように述べてきたが、いまはむしろ潮来花柳こそが全図巻中もっとも味わい深い傑作なのではないかと思われてくるのである。だが、無理に序列を決める必要もあるまい」と書いています。

この真景図は、四州真景の旅で訪ねた潮来の花柳街を描いたもので、図の右に花柳街の象徴であ

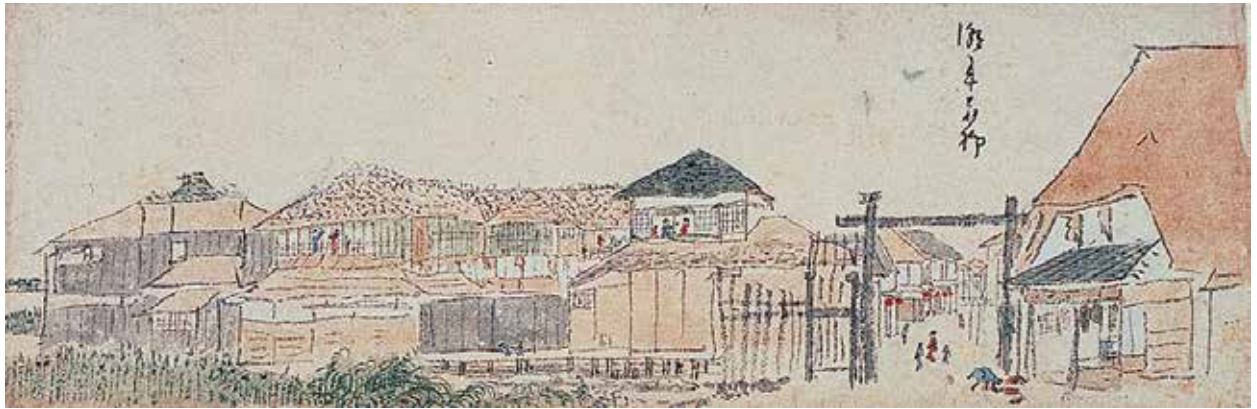
る大門があり、大門の上に、潮来花柳という注記が、多少太目の字で書かれています。大門の右には藁葺屋根の商家らしき建物があり、藁葺の質感が柔らかな感じで、表現されています。

大門の奥に軒を連ねる建物は、奥の方が小さく描かれていて、遠近法が使用されています。遠近法は人物にも使われていて、大門前の腰を曲げて何か作業をしている人物は比較的大きく描かれ、大門をくぐった所に描かれた、向かい合って話をしてる赤と藍の着物の女性は少し小さく、さらにその奥の人物はもっと小さく描かれています。

大門は黒門とも言われますが、門は黒色がかすれたように描かれています。画面上半分の背景、大半の屋根や壁の色調は全体に聚楽色というか、くすんだ黄褐色です。また手前には葦が生えています。これらが一体となり、物憂げな雰囲気を出しています。

その中で、大門左には、黒い屋根の建物があり、二階の障子を開けた窓には、遊女らしき赤や藍の着物の女性が描かれています。黒い屋根の隣には、茶屋と思われる大きな料亭風の建物が描かれています。その黒門寄りの二階には、客二人の相手をする赤い着物の女性、また、左寄りの棟の二階には高欄が見え、そこには赤い着物の女性が少し腰を曲げて立ち、その隣の藍の着物の女性は高欄にもたれて手を振っているように見えます。

茶屋の各部屋で練り広げられる遊女や客たちの描写によって日常から隔絶された、なまめかしく、少し怪しげな世界が生き生きと表現されています。



四州真景図「潮来花柳」 重要文化財 紙本墨画淡彩 13.5×40.5cm 個人蔵

そして、大門の奥に連なる建物の軒には赤い提灯がいくつかが下がっています。遊女や客は茶屋の大きな建物の中に小さく描かれていて、赤い提灯も点に近い大きさですが、それらがアクセントとなり、花柳街らしい華やかな雰囲気醸し出しています。

しかし華やかさは、そこに描かれた遊女や提灯のように小さく儂いもので、この真景図には繁栄に陰りが見え始めた潮来の、少し寂れた花柳街の独特の息吹というか色や音や匂い空気感のすべてが、華山らしい、やさしさや温かさに包まれて表現されています。

真景図の描写に関する細かな話はさて置き、この図を見ると、黄昏の利根の川風に乗って、大流行した潮来曲の名調子が、地方の三味線や太鼓の音とともに、僅かにも悲しく、またせつなく聞こえてくるようです。

八 潮来曲の唄 (利根川図誌より)

柳よやなぎよ直なるやなぎいやな風にもなびかんせ
 きみは三夜の三日月さまよ宵にちらりと見たばかり
 わしが心が竹にもあらばわつて見せたやこのむねを
 さまよかしまに神あるならばあはせたまへや今一度
 いたこ出じまの十二のはしを行きつもどりつしあん橋
 戀にこがれてなくせみよりもなかなぬ蜜がみをこがす
 いたこ出島のまこもの中にあやめ咲くとはつゆしらす
 戀のちわぶみ鼠にひかれねずみとるよな猫ほしや

九 終わりに

「潮来花柳」は四州真景図の中では、ちょっと異色で、テーマ的には、品川芸者がモデルと言われる、肖像画の校書図(重要文化財 絹本着色 一〇・二×四二・五cm 静嘉堂文庫蔵)と通じるものがあるように思います。多面性に富んだ華山の、意外な一面が垣間見えるようでもあります。それでは、また。

参考文献

『近現代における地方小都市の盛り場の復元ー水郷潮来の変遷を事例としてー』前島裕美 歴史地理学四三ー四
 『公娼制の成立と展開』小林雅子 女性史総合研究会編『日本女性史第3巻近世』東京大学出版会

『銚子地域における近代利根川水運の動向』仙頭達朗・田邊千尋 歴史地理学調査報告書第一号 筑波大学歴史・人類学系歴史地理学研究室

※連載中、一度紹介した文献は紹介を省略します。

※掲載の四州真景図「潮来花柳」は、原本から撮影された画像を使用しています。許可下さった所蔵者様に、深く感謝申し上げます。

令和元年度華山・史学研究会研修視察

足利の華山の足跡をたどる

令和元年度華山・史学研究会研修視察は、九月二十三、二十四日、日月曜日にかけての一泊二日で行われました。今回は、『華山会報』で連載中の『毛武遊記』でも登場する足利の足跡をたどる旅です。華山は天保二年（一八三一）十月（旧暦ですので、現在では、ちょうど十一月初ころにあたります）に訪ねています。

当日、午前八時三十分、豊橋駅に集合した会員は、石川洋一・加藤克己・柴田雅芳・別所興一・縦山伸次・鈴木利昌の六名でした。既に名古屋から乗車していた大崎洋を加えて、豊橋駅を八時四十三分の新幹線ひかり号で出発し、東京からJR上野東京ラインで北千住へ出て、中村正子と合流後、八名で東武特急りょうもう号で足利市駅へ移動します。足利市駅到着は12時を過ぎたので、駅構内で昼食を取りました。構内には、足利観光交流館「あし・ナビ」があり、観光パインフレットなどを入手できます。昼食後、タクシーを利用して最初の目的地である草雲美術館へ向かいます。草雲美術館は足利公園内にあり、敷地内には、田崎草雲旧宅でもある白石山房は、

足利市重要文化財（史跡）にも指定されています。田崎草雲（一八一五～一八九八）は、幕末から明治時代にかけて活躍した画家で、江戸神田小川町の足利藩邸に生まれ、金井烏洲や華山の師でもある谷文晁にも師事しました。草雲美術館には、渡辺華山晩年の作品『翎毛虫魚冊』（栃木県指定文化財）

が所蔵されています。訪ねた日には、美術館開館50周年「たけた絵師、田崎草雲」展を開催しており、30点ほどの作品を展示中でした。

次に訪ねたのは、社殿・神楽殿・社務所・手水舎

が登録有形文化財である足利織姫神社です。タクシーで移動したため、社殿裏側の織姫駐車場降りて向かいます。この地は、渥美半島の伊良湖岬恋路ヶ浜にもある恋人の聖地に指定され、境内に愛の鐘も設置されていました。境内からは、足利の市街地と渡良瀬川を眺めることができ



きます。二百二十九段の石段を下り、鏝阿寺へ向かうことにします。石段を降り切り、歩道橋を渡るとフジテレビ開局55周年記念映画「バンクーバーの朝日」のオープンセットという看板がありました。「バンクーバーの朝日」は足利市で二〇一四年にロケが行われた一九三〇年代、カナダのバンクーバーで活動した日系カナダ移民を中心にした野球チームの映画です。足利市内に組んだ戦前のカナダの町並みなどのセットの一部を残したもののようです。途中に日曜定休のため閉まっていたようですが、映画「湯を沸かすほどの熱い愛」（二〇一六年）で使用された市内唯一の銭湯「花乃湯」もありました。次に、雪輪町の「足利戸田家陣屋跡」を探します。この陣屋は、田原藩戸田家から分かれた戸田忠言（ただち）により築かれたもので、鬼門除けの屋敷稲荷が栄富稲荷として同町の一角に残されていました。建物自体は再建されたものと思われませんが、平成九年に建てられた道路沿いの案内板でおおよその位置は把握できました。

つづいて、足利一門の寺であり、足利氏宅跡として史跡にも指定されている鏝阿寺の西門から境内へ入りました。寺の四方は堀がめぐらされています。この門は栃木県指定文化財で、開基源姓足利氏二代の義兼により創建され、室町

時代の永享四年（一四三二）に再修されたものと言われています。参道をしばらく歩くと、左側に、国の重要文化財で、当初、義兼が妻の供養のために建立したものを一四〇七年に関東管領足利満兼により再建された一切経堂、一六九二年に徳川五代將軍の母、桂昌院尼公より再建された県の指定文化財の多宝塔があり、本尊の大日如来などの他に、足利家・徳川歴代將軍の位牌が祀られているようです。本堂（大御堂）は、尊氏の父、足利貞氏が再建し、二〇一三年に国宝に指定されています。足利幕府十三代將軍足利義輝の再建になる楼門（山門、栃木県指定文化財）から出て、大門通りを史跡足利学校方面へ向かいます。今号の「毛武游記②」の連載でも華山が訪ねた際の鏝阿寺の様子が掲載されています。途中で征夷大將軍足利尊氏公像がありました。向かいに



は、「八日目の蟬」でロケ地となった松村写真館がありました。足利市には、古い建物も多く、映画・ドラマのロケ地となっています。作品のファンのロケ地めぐりやコスプレヤーも多く訪れているようです。夕刻も近づいてきましたので、翌日のために足利学校周辺を確認しながらJR足利駅前の東横イン栃木足利駅北口にチェックインしました。暗くなってから、毎年の視察で同じパターンですが、食事所（アルコールあり）へ向かったのです。第二日目は、足利駅から徒歩で足利学校へ向かいます。この日は、午前10時から開催されるこども釋奠を見学します。公募された足利市内の小学校4年生から中学3年生までの12名が祭官として登場します。まだ時間がありましたので、足利市の観光情報を入手できる太平記館に寄り、市内の観光情報を入手します。足利まちなか遊学館は、足利の伝統産業である織物関係資料や映像のまち推進事業に関する展示や大正時代末期から昭和初期にかけて一世を風靡した足利銘仙などの着物レンタルもできるようです。まちなか遊学館脇の参道から孔子像と石畳のある松並木を通して足利学校へ向かいます。入徳門前で集合写真を撮影後、学校内に入場します。この日は学校門にも門幕が張られています。釋

奠は、中国で行われていた儒学を大成させた孔子と孔子門下の学者をお祭りする行事で、足利学校では室町時代から実施され、途中で途絶えましたが、江戸時代の寛文八年（一六六八）に釋奠祭器を新調し、行なうたものと考えられます。現在の釋奠は明治四十年（一九〇七）に書かれた『足利学校遺蹟釋祭略式』の祭典序次に基づき挙行され、こども釋奠は平成二十六年から始まった行事です。釋奠見学後、工事中でしたが、華山も訪れた孔子廟を見た後、旧遺蹟図書館内で開催されていた「文晁・華山・草雲と足利学校」展を見学し、庠主のお墓をお参りし、学校を後にします。学校前で昼食を取り、足利市駅まで戻り、岐路へと向かいました。



研究会員 鈴木利昌

公益財団法人華山会
田原市博物館 からのご案内

田原市博物館企画展のご案内

八月八日(土)～九月二十七日(日)

企画展 学芸員が選ぶ田原市博物館の名品

(企画展示室)

田原市博物館に収蔵された資料の中から学芸員おすすめの資料を展示。

愛知県指定文化財 伊良湖東大寺瓦窯跡出土品 鎌倉時代(一二世紀末～一三世紀初頭)



ギャラリーートーク

会期中二回

程度実施(詳細は後日ホームページにて)

同時開催・華椿系の系譜 野口幽谷 椿二山 松林桂月(特別展示室)

十月三日(土)～十一月二十九日(日)

企画展

ふるさとの歴史

ふるさと「田原」の歴史を展示紹介します。会期中、展示替あり。



渥美半島航空写真

展示解説 会期中二回程度実施(詳細は後日ホームページにて)

講演会 十月十一日(日)午後一時

三〇分 華山会館(演題・講師については後日ホームページにて)

同時開催・重要文化財 渡辺華山関係資料(特別展示室)

詳細はチラシ等でお知らせします。

田原市博物館平常展のご案内

六月二日(火)～八月二日(日)

華山と弟子たち 福田半香と平井顯齋(特別展示室)

田原の歴史 田原城・田原城主のあゆみ(企画展示室)

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています(要事前予約)。

渥美郷土資料館でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展 一般 四〇〇円(三二〇円)

平常展 一般 三二〇円(二四〇円)

小中生 一五〇円(一二〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

毎週土曜日は小中高生無料

(一)内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。(呈示により無料入館)

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第四十四号

令和二年六月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 大根義久

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江一二の一

TEL〇五三二・二二・一七〇〇

FAX〇五三二・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 令和二年十一月一日